

## セミパラチンスク診断センターへインターネットで遠隔講義



挨拶する関根施設長（右）



講義する前田講師（左）及び  
通訳を務めたセリック助手（右）



遠隔講義の様子

大学院医歯薬学総合研究科は11月30日(木), 附属原爆後障害医療研究施設とカザフスタン共和国のセミパラチンスク診断センターとをインターネットで接続し, 関根一郎施設長による開講の挨拶後, 医療科学専攻展開医療科学講座移植・消化器外科学分野の前田茂人講師が「マンモグラフィーによる乳がんの診断」のテーマで同診断センター並びにセミパラチンスク医科大学の医師および学生約30名に遠隔講義を行いました。

旧ソ連のセミパラチンスク核実験場では, 1949年から1989年までの間に約450回の核実験が行われ, 100万人以上の周辺住民が放射能汚染により被害を受けたといわれています。一般に, 放射線によって乳がんが誘発されることも知られており, 近年, セミパラチンスクでも乳がんの増加が見られています。今回のテーマは, こういった背景を受けたタイムリーなもので, 実践的な乳がん診断のポイントについて分かりやすく解説され, 講義終了後には, マンモグラフィーによる診断方法と他の診断方法との違いに関する質疑応答などが活発に行われました。

今回の講義はセミパラチンスクに対しての最初の遠隔講義であり, 長崎大学21世紀 COE プログラム「放射線医療科学国際コンソーシアム」のプロジェクトの一環として行ったものです。併せて, 国連およびカザフスタン共和国の乳がんプログラム, 教育プログラムの一環でもあります。

講義はセミパラチンスク医科大学出身で, 同施設資料収集保存部生体材料保存室(原研試料室)のセリック・メールマノフ助手の同時通訳により進められ, 受講者からは「講義には大変満足しているので今後も遠隔講義を続けて欲しい」といった要望がありました。

なお, 本年8月には, 医学部で行われた「原爆犠牲者慰霊祭」の様子が同診断センターへ, 同診断センターで行われた「セミパラチンスク核実験開始57周年・核実験終結15周年記念式典」の様子が同施設へインターネットで生中継されるなど, 本学とセミパラチンスクとは活発な交流が行われています。

(医歯薬学総合研究科学術協力課)